

設計を進める上で特に留意すること

### プレイスメイキングによる文化芸術と災害文化の融合

- ・広瀬川の自然に抱かれたこの場所において、文化芸術と災害文化の融合のあり方の内容やイメージを、市民や芸術家、専門家の皆さんと一緒に構築していくパートナーとして貢献すべく、プレイスメイキングによるデザインプロセスをご提案します。
- ・広瀬川と合わせた景観上のあり方、入れ子構造になったそれぞれのボリュームの大きさや配置、ボリュームの間に生まれる広場や小さな居場所の構成など、現地でのワークショップを重視しながら関係者みなでこの場所をつくりあげていきたいと思ひます。そのプロセス自身が、この場所における文化芸術と災害文化の融合のかたちとして、像を結んでいくことになるでしょう。



### 防災・減災の高い専門性と行動力、柔軟性をもつチーム

- ・若手の行動力・柔軟性に、復興や防災・減災の学術的視点に加え、多角的な議論による質の高い空間を作ります。
- ・市内の河川沿い公園・公園施設の設計実績があり、技術協力者とは協働経験が多く、関係先調整力の高いチームです。

コスト縮減に関する提案

### 品質を確保しながら合理的にコストを縮減します

- ・各棟のボリューム検討とそれらの配置検討により柔軟な面積調整が可能で、コスト縮減とコンセプト実現の両立が可能です。
- ・壁を2重にした入れ子構造とすることで、大空間の壁厚を縮減し、コンクリート量を削減することができます。
- ・広場エリアの屋根は木造屋根とし、地場産木材を使用することで輸送コスト・CO2を縮減します。
- ・屋根防水や外壁には耐久性の高い材料を使用し、日除けルーバー等温熱環境負荷低減の措置を講じLCCを抑えます。

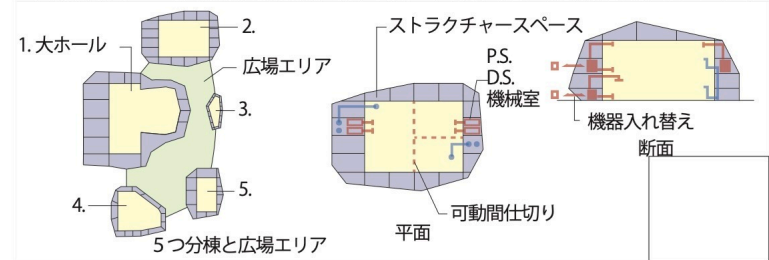
### コンセプトを実現する的確かつ柔軟なコスト管理

- ・基本設計から段階的コストチェックを行い大幅なコスト調整による後戻りの無い業務を遂行します。各エリアごとに坪単価を設定し管理することで、柔軟に面積を調整し予算内でコンセプトを実現します。多くの公共実績を元にしたコストデータにより、物価動向を見定め徹底したコスト管理を図ります。

将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

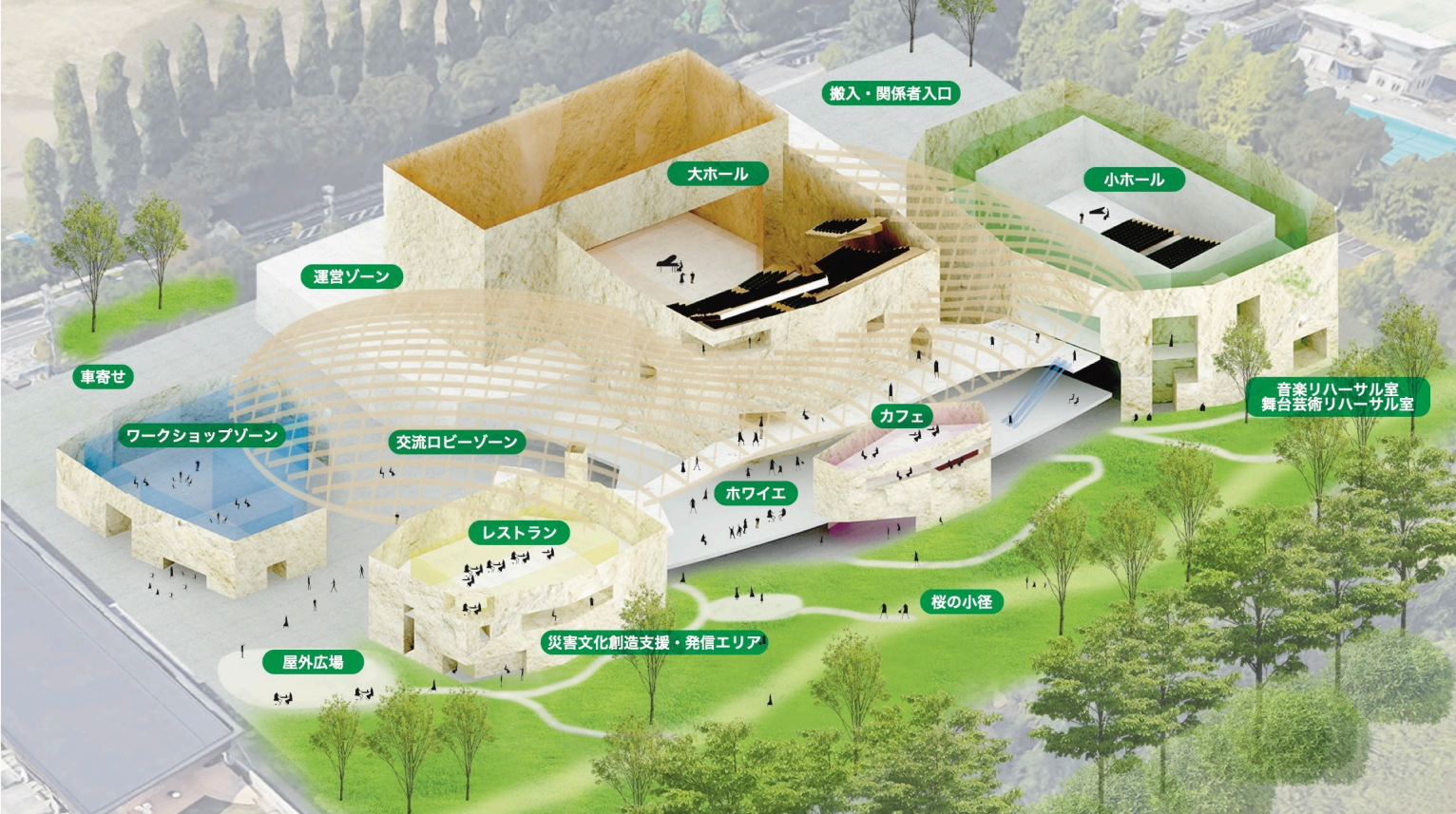
### 入れ子構造による更新性・可変性の高い計画

- ・分棟により棟毎に完結し広さに応じた設備で配管距離等を抑えます。
- ・各棟は大空間をストラクチャースペースが覆う「入れ子構造」であり、棟毎に設備機能を外部に面する箇所に集約することでルートの最短化し設備更新を容易にします。ストラクチャースペースが大空間のキャットウォークとなり、点検・更新がし易い施設を作ります。
- ・中心の大空間は将来の間仕切り位置の変更が可能な計画とします。
- ・棟毎の改修が可能で部分改修や継続利用を想定した工事が可能です。
- ・自然素材と工業製品を適材適所で使い、耐久性と更新性を高めます。



## 自然に抱かれ、奏であう「河岸の石庭」

広瀬川は長い時間をかけて丘陵を削り、仙台の街の礎となる台地を形成してきました。自然の大きな力に抱かれたこの場所で、文化芸術と災害文化の融合のあり方をみなで奏であう場として、河岸の石庭を提案します。



全体イメージ図：河岸の石庭は大きな石が点在し、その間にできた隙間が広場や道となり、周辺環境と連続していく。閉じた石の間では様々な活動に集中して打ち込むことができる。それぞれの石に開放された穴からは音が奏でられるように文化芸術と災害文化の活動が滲み出し、この場所の風景をつくっていく。

設計の理念と考え

### 1 青葉山の自然に寄り添い文化の流れをつくる

- ・仙台の地形は河岸段丘と蛇行する広瀬川からなり、特徴的な地形が「豊かな自然環境」と「都市」を築いてきました。仙台開府以前から川が大地を侵食してきた長い時の流れを尊重し、自然に寄り添い共に発展する新たな文化の流れを考えます。



- ・音楽ホールは県立美術館や市立博物館、ビジターセンター(仙臺緑彩館)の並びの中に建つことから、文化交流を外に開き、エリアの繋がりや回遊性を高め、場所の力を強めるような、いきいきとした流れを生み出す建築を目指します。

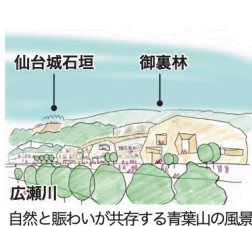


### 2 青葉山エリアの風景に呼応するランドスケープ

- ・青葉山エリアには仙台城跡をはじめとする歴史と天然記念物青葉山の豊かな自然が共存する景観が形成されています。自然と歴史の根底にある地形から建築を考え、これらの歴史と自然に呼応する風景をつくり、エリアの価値や魅力を向上させます。



- ・青葉山公園や国際センターなど文化、観光、学術といった活動が集積しており、都心からほど近い立地を活かした市民活動が可能です。その賑わいが自然という舞台から滲み出してくる仙台ならではの風景をつくり訪れる人を出迎えます。

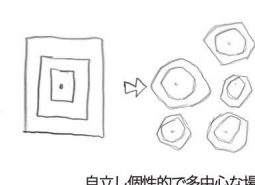


### 3 多様な価値観を育む多中心な環境

- ・青葉山には「御裏林」として400年にわたって生態系が維持されてきた自然林が残っています。多種の樹林パッチがモザイク状に配列することで異なる光環境や土壌をつくり、生物多様性を成立させています。この稀に見る種の多様性の構造に倣いプロジェクトを進めます。

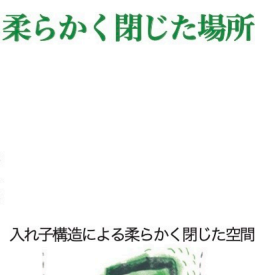


- ・音楽ホールと震災メモリアル拠点の融合を考えるにあたっては、この多様な林床空間のようにそれぞれが自立し個性的で、互いに影響し合いながら成長する多中心な場の創出を目指します。

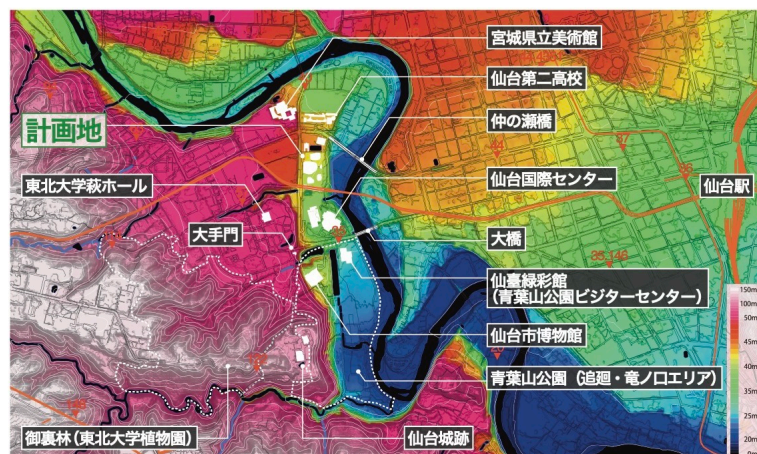


### 4 だれもが安心して集うことができる柔らかく閉じた場所

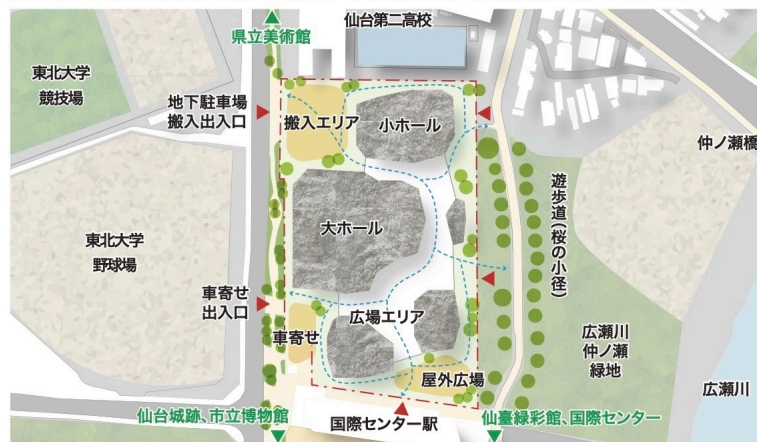
- ・本計画では音楽や震災の記憶を扱うことから、閉じた空間の作り方が重要と考えます。開放的過ぎず閉鎖的過ぎない、柔らかく閉じた空間を考えます。薄い被膜を2重にした入れ子構造によって包みこまれるような空間をつくります。



- ・音楽を中心とする文化芸術と災害文化の適切な距離感を計画し、だれもが安心して集い、音楽や震災の記憶と集中して向き合うことができる場所をつくります。離散的配置による関係性を検討し、自然な交流を生み出します。



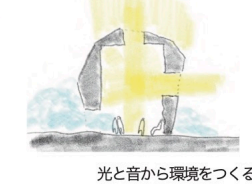
敷地周辺段彩図：仙台市街地が立地する河岸段丘は、北東から青葉山麓を流れる広瀬川に向かって上から上町段丘、中町段丘、下町段丘といわれる3段構成になっており、広瀬川の蛇行は段丘状の地形と大きくかかわっている。仙台の町割りもこの段丘地形と広瀬川の関係しており、仙台というまちの「はじまりの地」である青葉山エリアにはまちに向けた舞台のような広瀬川沿いの段丘があり、その上に文教・歴史施設が点在している。



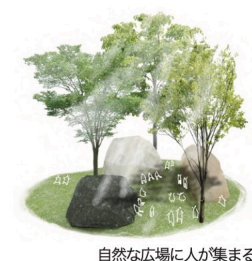
配置イメージ図：川に転がる石をイメージした配置。石の隙間は道や広場となる。建物の裏を無くし、遊歩道と連続する回遊動線によって、人の流れをつくる。

### 5 光と陰の空間、音と静寂の空間

- ・入れ子構造に空けた穴によって光や音を切り取ったり、透かしたりすることで光と陰、音と静けさの濃淡のある空間を考え、音楽ホールだけでなく、だれもが豊かな光と音を享受できる建築を考えます。



- ・林床空間のように木漏れ日がさし、自然の中に立ち現れたような広場を考えます。ボリューム配置の検討により「自然な広場のあり方」を考え、目的が無く立ち寄った人も自然になかに入ることができ、居心地が良く、だれもが思い思いに過ごすことができるオープンスペースをつくります。



### 6 芸術と記憶の響き合い

人は音楽や芸術表現を通して自然の深い様相を感じとります。また人々は災害によって自然の脅威に直面し、再生していく過程で紡がれる記憶がこの場所に文化を育みます。文化芸術の総合拠点であり、災害文化の創造拠点でもある本施設で体現されるのは、文化芸術と災害文化の共通の根ともいえる自然に抱かれた場です。広瀬川が長い時間をかけて丘を削り、仙台の街の礎となる台地を形成してきたように、この場所において自然の大きな力に抱かれながら、ここに集う人々がそれぞれのインスピレーションで奏であい、芸術と記憶が響き合う場をつくるためには、計画段階から関係者との対話を重視し、共に考え共につくっていくことが重要と考えます。

